大宝館展示人物紹介
（過去に展示された人物含む）

分野	氏名	概　　要
美術	山本 甚作（やまもと・じんさく） 大正４年（1915）～平成８年（1996）	人物画を得意とし、ピエロやフラメンコなどを好んで描いた。また梁人の雅号で墨彩画にも力を入れた。その適格なデザイン力と表現力、豊かな色彩感覚は多くの人を魅了した。 東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業、戦後の一時期、鶴岡市内で中学校や高校の教師を務めた後、昭和28年に上京して新聞雑誌の連載小説などの挿絵を潤筆しながら洋画家として活躍する。 戦後の前衛、抽象ばやりの時代にも揺れることなく具象一筋の道を歩み続ける。 洒脱で飄々としたもの柔らかい人柄で「山甚さん」と愛称され多くの人に慕われた。 藤沢周平をはじめ多くの作家の連載小説の挿絵を潤筆している。作家の丸谷才一は、従兄弟であるが兄弟のように育ったという。
美術	齋藤　求（さいとう・もとむ） 明治40年（1907）～平成15年（2003）	鶴岡市高畑町（現山王町）にある高山樗牛の生家・齋藤家に生まれ、県立鶴岡中学校（現鶴岡南高等学校）を卒業後、東京美術学校（現東京芸術大学）に進んだ。在学中の昭和２年に、二科展の入選を皮切りに多くの美術展で入選し、その才能を開花させた。 終戦とともに帰郷し、市内の中学校で教鞭をとった後、母校の鶴岡南高等学校で17年間美術指導にあたり、多くの芽を見出し育てた。この間、郷土の美術団体「白甕社」の委員長として会の中心にあって自らの創作活動にも心血を注ぎ、地域美術の活性化に力を尽くした。 退職後は東京にアトリエを構えて創作活動に専念し、一層の研鑽をつむため広く海外にも足を運び、個展も精力的に開催。その洗練された画風は中央においても多くの人々に感動を与えた。上京してからも郷里に対する思いは深く、地元でも数多くの個展を開いた。 晩年まで旺盛な意欲を持ち続け制作にあたり、日本画壇の重鎮として数多くの秀作を発表した。
美術	今井 繁三郎（いまい・しげさぶろう） 明治43年（1910）～平成14年（2002）	郷土の美術団体「白甕社」の委員長を長く務め、地域に根差しながらも中央と地方、地域間の相互交流を深め、当地方だけでなく、広く美術界に多大な貢献をした。 羽黒町（現鶴岡市羽黒）に生まれ、鶴岡中学（現鶴岡南高校）卒業後に芝絵画研究所に入所以来、一貫して画壇の活動に専心し、「白甕社」を全国にも比類なき美術団体に育て上げた。この間、全国各地で個展を開催し、多くの美術団体の創立に携わり、役職に就任し全国的にも大きな足跡を残した。 また、長く町の広報委員長や社会教育委員を務め、行政、教育関係でも活躍し、鶴岡市特別文化功績賞などの美術・文化関係の表彰だけでなく、行政功労者表彰、名誉町民にも推挙されている。自由闊達にして質実剛健、旺盛な行動力と卓越した識見の人であった。
美術	伊藤 喜久井（いとう・きくい） 明治44年（1911）～平成14年（2002）	鶴岡町七日町（現鶴岡市本町）に生まれる。山形県立鶴岡高等女学校（現県立鶴岡北高等学校）へ入学。在学中、小貫廉（博堂）氏の指導を受ける。卒業後、女子美術専門学校（現女子美術大学）日本画師範科に進学し、荻生天泉氏に師事する。その後、東京で展覧会に出品するなど画業を積んだ。 終戦とともに帰郷し、日本画の研究製作に取り組む。昭和30年以降は、白甕社における日本画部門の充実を図り、後継者の育成にあたる。 昭和54年には、有志で火曜会（現佳陽会）を結成し、日本画の指導にあたり、毎年発表会を開催。また、鶴岡市内で各種日本画講座の講師も務めるなど、永年にわたり日本画の普及・発展に尽力し、美術文化の振興発展に寄与した。その功績により、平成９年に、鶴岡市市政功労者表彰、翌１０年に、齋藤茂吉文化賞を受賞。

大宝館展示人物紹介
（過去に展示された人物含む）

分野	氏名	概　　要
機械工学	斎藤 外市（さいとう・といち） 慶応元年（1865）～大正15年（1926）	「発明は俺の生命だ。俺の一つの病気だ。」この病気に一生かかりっぱなしになった人が斎藤外市である。 彼の発明は余りにも多く、個々に列挙はできないが、機械関係と軍用機器関係の二つの流れがあると言える。後者では飛行船・潜航艇・各種水雷・飛行機・十連発小銃などあるが、何といってもその中心は織機であった。より能率的な力織機の発明に着手し、7年かけて成功。更に、当時供給をはじめた電力との結合にも成功して量産を可能にした。 輸出羽二重を電力で製織したのは我が国最初のことである。この織機は大好評を得て県外にも大量に送られ、一時は年間1万台に及んだ。 両羽実業新聞・鶴岡瓦斯（ガス）会社の設立にも関与し、市議会議員としても働いた。鶴岡公園に胸像がある。
社会福祉	佐藤 霊山（さとう・れいざん） 嘉永4年（1851）～昭和2年（1927）	一生を檀信徒の教化と社会事業に尽くした。常念寺の住職となり、その頃から災害のあるたびに私財を投じて難民の救済に当った。貧困家庭の子供のために日本最初の学校給食を実施したことは有名である。火災のために学校が廃止になると忠愛協会を設立、同志とはかって月2回托鉢して基金をつくり、貧しい家庭の児童たちに学用品・雨具・昼食を与えた。 身元不明の行き倒れの死体があればそれを葬り、とかく世間から白い目で見られがちな刑務所あがりの人があれば、これを励まして再出発の力になった。 また、時間観念の乏しい当地方の人々のために″刻の鐘″を鳴らすなど、地域社会のために一生を捧げた。
自然科学	松森 胤保（まつもり・たねやす） 文政8年（1825）～明治25年（1982）	幼名欣之助、通称嘉世右エ門。胤保は晩年の号である。庄内藩士の子として鶴岡に生まれ、致道館に学ぶ。庄内藩の支藩である松山藩の付家老として幕末混乱期の藩政を処理し、戊辰戦争の功により藩主より松守（松山を守るの意）の姓を賜ったが、辞して松森とした。 以後十数年、同地方の公職にあって政治・文化面で貢献し、一時は県会議員も勤めた。勤めのあい間に、動植物学・物理学・化学・工学・歴史学のほか考古学等に至るまで調査研究に励み、特に公職を引退してからはこれに没頭、著書700冊に及ぶという。代表作「両羽博物図譜」59冊は、その分類法において近代のそれに迫るものがあり、その研究は実証的な傾向をもつ優れたもので、県の有形文化財に指定されている。 博識多才で、百科全書的な才人だったが68歳で死去。鶴岡市内の禅源寺に大きな墓碑がある。
政治	松本 十郎（まつもと・じゅうろう） 天保10年（1839）～大正5年（1916）	鶴岡に生まれ、旧姓名を戸田總十郎といい、致道館に学ぶ。文久3年から慶応元年まで、父に従い蝦夷地警備についた。戊辰戦争では幕僚、機事係（他藩との交渉役）として活躍した。 庄内藩の降伏後、松本十郎と名を変えて上京し、藩の戦後処理に奔走。新政府の要人と交友を深め、折衝に当たった。 明治2年、黒田清隆の推薦で北海道開拓判官として北海道に渡り、漁場を開発し、北海道最初の燈台を建設、また原野の開拓に力を尽くした。アイヌの信頼を得て「アツシ判官」（アイヌの用いる衣服を着用したことから）と慕われた。アイヌの人権を守るため、時の政府と争い、38歳にして職を辞し鶴岡に帰った。 以後、晴耕雨読の生活をし、隠棲の時を過ごした。庄内各地の多くの碑文の選者になっている。78歳で死去し、鶴岡の安国寺に葬られた。

大宝館展示人物紹介
（過去に展示された人物含む）

分野	氏名	概　　要
建築	高橋 兼吉（たかはし・かねきち） 弘化２年（1845）～明治27年（1894）	明治初期、当時新しい建築様式であった洋風建築の研究に挑み、現在庄内地方に現存する旧鶴岡警察署、東・西田川郡役所、大山小学校（新民館）等々、養子 巌太郎を指導しながら多くの洋風建築物を残した。 この様な建築物は、明治初期の建築物の典型と目されるもので、和・洋を巧みにこなしている点で技術的に優れたものである。 また、松ヶ岡開墾場蚕室や、荘内神社社殿、由豆佐売神社の建造、また善宝寺五重塔の建立にもかかわっている。仕事には大変厳しかったが、人情に篤く、弟子や使用人はもちろん、近隣の人々の面倒をよく見て多くの人々に慕われた。 50才で生涯を閉じたが、葬儀の日は延々長蛇の列であったという。
建築	高橋巌太郎（たかはし いわたろう） 文久３年（1863）～昭和13年（1938）	伊勢の皇大神宮・明治神宮等、日本最高の権威ある神宮建立に当った宮大工棟梁。 馬町の宮大工棟梁山本佐兵衛（善宝寺五重塔建立）の長男として生まれたが、当時この地方随一といわれた大工棟梁・高橋兼吉に弟子入りし、見込まれて養子になった。以来 兼吉と共に当地方の重要建築物の建造に腕をふるったが、兼吉の没後は、彼の腕を必要とする仕事に恵まれず、38才の時に新天地を求め、妻子を連れて上京した。 昼は働き、夜は夜学に通って建築の勉学に励み、苦学力行、ついに日本一流の宮大工棟梁にまで出世した。 清廉潔白な人柄で、趣味とした書・絵・篆刻など優れた作品を残している。76才で没し、禅源寺に墓碑がある。
民俗学	戸川 安章（とがわ・あんしょう） 明治39年（1906）～平成18年（2006）	山岳修験道を調査研究し、出羽三山の文化的価値を国内外に広めた、日本民俗学の第一人者。山形県民俗研究協議会会長、日本山岳修験学会顧問を歴任した。著書には、「新版　出羽三山修験道の研究」「羽黒山二百話」「校註　羽黒中興覚書」など数多くある。 東京小石川に生まれ、その後、羽黒町手向に転居。旧手向村の村議、助役、村長代理を経て、山形県立鶴岡高等女学校（現県立鶴岡北高等学校）の教諭・教頭、鶴岡女子専門学校長を務め、その間、市社会教育委員、市文化財保護委員に就任するなど、行政、学校教育のみならず社会教育の分野でも広く活躍。多くの功績により、高山樗牛賞、齋藤茂吉文化賞、柳田國男賞等を受賞。昭和52年には、勲五等双光旭日章を受章。平成９年には、羽黒町名誉町民となり、市町村合併により鶴岡市名誉市民となる。
法律	齋藤 悠輔（さいとう・ゆうすけ） 明治25年（1892）～昭和56年（1981）	温海町湯温海（現鶴岡市湯温海）に生まれ、荘内中学校、旧制一高を経て、東京帝国大学法学部を卒業後、大阪地方裁判所司法官試補に就任した。 その後、大阪区裁判所検事代理、大阪地方裁判所判事、同裁判所長、東京地方裁判所検事、司法大臣官房調査課長を歴任し、昭和12年には、司法制度調査のため欧米各国を歴訪した。その後も、高知地方裁判所長、東京刑事地方裁判所判事、大審院判事、東京控訴院部長、広島・大阪各控訴院検事長を務め、昭和22年には、最高裁判所判事となった。 定年退職するまでの45年の長きにわたり裁判所に勤務し、また裁判官の最高位ともいうべき最高裁判所判事として15年間務め、日本法曹界の至宝として活躍した。その功績に対し、昭和40年４月に勲一等瑞宝章が授与され、同年７月には、温海町名誉町民に推挙された。刀工として有名な齋藤清人は祖父にあたる。

大宝館展示人物紹介
（過去に展示された人物含む）

分野	氏名	概　　要
教育	布施　豊世（ふせ・とよせ） 明治9年（1876）～昭和21年（1946）	鶴岡ではじめての私立幼稚園（荘内婦人会幼稚遊戯園）の創設を実現させた。 横浜のフェリス女学院を卒業、東北学院で美術の教師をしていた布施淡と結婚するが、間もなく夫が死去すると、鶴岡女学校に奉職し、その間に幼児教育の重要性を説き、鶴岡で初めて私立の幼稚園の創設。 荘内婦人会幼稚遊戯園は、明治43年に新築され、私立荘内婦人会幼稚園と改称し、現在の鶴岡幼稚園に引き継がれている。 その後、仙台に移り東北学院の院長夫人のアシスタントとして教会などでキリスト教の布教、伝道活動を続けた。アメリカにも留学し、帰国後は仙台を中心に学校や教会等で、キリスト教の講話や伝道を行った。昭和20年に黒川村（現鶴岡市黒川）に疎開し、71歳で没した。
教育	伊藤 鶴代（いとう・つるよ） 明治元年（1868）～昭和８年（1933）	鶴岡家政高校（現鶴岡中央高校）の前身である鶴岡裁縫塾を創設し、女性としての教養道徳心の涵養と裁縫技術の練磨を以て地域に根ざした女子教育の振興に専念した教育者である。 鶴岡高等女学校設立とともに請われて裁縫教師となり、その勤務の傍ら文学・宗教の修行にも励んだ。 以後独力で自宅に裁縫塾を開設。後に塾の同窓会である如蘭会や仏教婦人会等の支援を得て塾舎を新築、名称を鶴岡裁縫塾とし塾長となった。更に翌年には私立鶴岡裁縫学校と改称し、その初代校長に推された。 なお、若くから裁縫で一家を支えたことから孝子として県知事表彰を三度受けている。
書道	黒崎 研堂（くろさき・けんどう） 嘉永６年（1853）～昭和３年（1928）	藩校 致道館に学んだ最後の世代。本名は馨。通称は与八郎、研堂は号である。酒井玄蕃・酒井調良の弟でもある。藩士として戊辰戦争で戦い、後田山開墾、北海道開拓に従い、金融機関への奉仕・天保堰水利組合加入への努力等々、一連の活動もさることながら、研堂の面目はやはり書家としての面であろう。日下部鳴鶴に師事して以後、書風が一変し、本格的な書家としての道を歩むことになった。 鳴鶴との結びつきは一人研堂の書に限らず鶴岡の書道界と中央との関連を持ち得たという点でも重要な意味をもつ。 研堂の書法は廻腕法といわれる。また「書は楷書より習うべし」といい、「書の第一は気品にあり」として、精神表現・心の修養を強調した。研堂自身深い学殖とすぐれた詩文を心の糧として風格ある書風を築いていった。
経済	日向 豊作（ひなた・とよさく） 明治８年（1875）～昭和17年（1942）	豊作の活動範囲は極めて広く、製塩業から煙草の販売、北洋漁業（株）の設立、さらに西田川郡水産会長もつとめたほか、金融界でも長らく活躍した。また、町会議員、県会議員、市議会副議長などの要職を歴任し、政治家として地方政界に重きをなした。 大正15年に鶴岡庶民信用組合を設立。その初代組合長に推され、終生組合の発展に尽くした。公正無私、清潔で信望の人であった。 次女、千代は小説家横光利一に嫁し、始終その創作活動を支えたが、横光は知人への手紙の中で「家内の親父といふものは、長年の間にいつのまにやら自分の親父のやうな気がしてゐるものですね」と語り、豊作を慕った。 時代を見すえた独自の世界観と先見性を持ち、晩年まで読書を続けた勉強家でもあった。

大宝館展示人物紹介
（過去に展示された人物含む）

分野	氏名	概　　要
芸術	遠藤 虚籟（えんどう・きょらい） 明治23年（1890）～昭和38年（1963）	我が国綴織工芸界の第一人者であり、世界的な巨匠であった。 京都の大久保寿麿について三十日間錦織の手ほどきを受け、以来独学で研究を重ね、独特の綴錦織の技法を生み出した。綴錦織とは、経糸の下に実物大の下絵を置き、鋸のように削った手指の爪で緯糸を掻き寄せ、筋立てて櫛と筬を使って緯糸をかたく締め、緯糸で経糸をおおって絵や模様を描く織物である。デザインの構想から完成まで一人で行うところに特徴がある。芸術保存有資格者としての特典を与えられ、以来貴重な作品を多く世に残した。 名利をかえりみず、一本一本の糸にひたすら芸術の強い情熱と信念をたくした生涯であり、格調高い作品は見る人の心を離さない。
軍事国防	石原 莞爾（いしわら・かんじ） 明治22年（1889）～昭和24年（1949）	旧陸軍中将。軍人ではあるが、全人類の平和を希求した人である。 日本・満州・蒙古・朝鮮・中国の五族協和によるアジアの共存共栄を指導。又、日本・満州・中華民国提携による東亜連盟の主導。更に、「世界最終戦論」を唱え世界の永久平和を希求した。 予言的人格もあって多くの支持者を得、戦史と日蓮の哲理を支柱として広く一般に思想的影響力を与えた人である。 第二次世界大戦中は、東條英機（時の総理大臣）と意見を異にし戦争体制を批判した。53才で予備役に廻され、飽海郡西山に移住し、同志を指導して集団農場を拓いた。「新日本の道標」「新日本の建設」などを著し、農工一体論を説いた。
軍事国防	佐藤 鐵太郎（さとう・てつたろう） 慶応2年（1866）～昭和17年（1942）	鶴岡市荒町（現山王町）に生まれた。朝暘学校から海軍兵学校に進み、明治25年、海軍大学校丙号を首席で卒業した。その後、日清・日露戦争に従軍し、第一艦隊参謀長、海軍大学校長等の重職を歴任し、昭和9年勅選貴族院議員となる。 戦史研究家として、古今東西の戦史を深く研究し、「帝國國防史編」を著した。当時陸軍が主張した大陸進出論に対抗し、海洋発展という新たな海軍戦略の思想を打ち出して、「海主陸従」の国防方針を主張。わが国が追求すべき外交目的は、太平洋の平和でなければならないと説いた。 戦時中にあって、国防を政治・外交のみならず、経済・社会と多角的な関連でとらえ、島国日本のとるべき道を「海洋国家」、「貿易立国」と説いた人である。書をよくし、雅号を「藍渓」と称して地元では書家として知られるほか、剣道家として心形刀流・伊庭想太郎に師事した。

大宝館展示人物紹介
（過去に展示された人物含む）

分野	氏名	概　　要
映画	本多 猪四郎（ほんだ・いしろう） 明治44年（1911）～平成5年（1993）	映画「ゴジラ」をはじめ、多くの特殊撮影映画の監督として、日本だけでなく世界に知られた映画監督である。 鶴岡市大網に生まれる。小学校3年の時東京の高井戸小学校に転校する。このとき初めて映画に出会い、強い感動を受けたという。 日大芸術学部映画科卒業の前に東宝に入社し、映画人としての第一歩を踏み出した。昭和26年水中撮影を取り入れた映画「青い真珠」で本格的な監督デビューをはたした。 昭和29年、円谷英二と組んで映画「ゴジラ」を監督、日本最初の本格的SF映画として大ヒットした。その後数多くの映画の監督として海外にも知られるようになった。親友の黒沢明監督の一番の協力者として演出などを担当したことでも知られている。
短歌 漢文詩	上野 甚作（うえの・じんさく） 明治19年（1886）～昭和20年（1945）	大正から昭和にかけて、「島影」という短歌を載せる雑誌の中心となって活躍し、この地域の短歌の向上発展に尽くした人である。 外内島に生まれ、荘内中学校（鶴岡南高校）3年終了後、農業に従事し、このころから文学に親しみ、特に短歌にひかれ作歌をはじめた。 大正11年に歌集『耕人』を発表、その後も『郷土礼賛』『停雲』など次々と歌集を発表し、農村歌人として広く知られるようになった。 一方、庄内に生まれ育った数多くの歌人や俳人の研究発掘を進め紹介した。斎村（今の鶴岡市斎地区）の村長を長く務め政治の上でも重要な役割を果たした。 昭和18年開拓団長として満州（中国東北部）に渡ったが、終戦直前に60才で没した。昭和34年 鶴岡市立図書館ではその文名を後世に残すため、短歌作品募集の「上野甚作賞」を制定してる。
短歌 漢文詩	土屋 竹雨（つちや・ちくう） 明治20年（1887）～昭和33年（1958）	幼名大助。長じて久泰といい、竹雨は号である。当代漢詩人の第一人者といわれた。 幼時より祖父久礼に和漢の書を学び漢詩の手ほどきをうけていて、11～2才頃には五言・七言絶句を作詞していたという。 竹雨の漢詩は、無欲恬（てん）淡、豪放洒脱といわれ、また、こよなく酒を愛し、興に乗っては詩をはき出すという面もあり、東洋詩人の面影があったという。 書画においても一家を成している。書は格別の師をもたず、型にとらわれず、独得の書の世界を開いた。画は榊原鉄硯に師事し、書と画との一体化を果した。戦後しばらく帰郷し、漢詩の普及にあたった。
音楽	菅原 喜兵衛（すがわら・きへえ） 明治36年（1903）～平成10年（1998）	著名な作曲家中田喜直氏との親交を通じて鶴岡・田川の音楽の普及と振興に尽力した人である。 中田氏が初めて来鶴したのが昭和21年、以来2人は親交を深め多くの学校で音楽教室を開催し、青少年に格調高い本物の音楽を提供し情操教育に情熱を捧げた。 また、昭和27年、中田喜直氏の作曲した名曲「雪の降る街を」は喜兵衛氏が御する馬そりから見た鶴岡のイメージから曲想を得たという。 その後「よい音楽を楽しむ会」を主宰し、第一線で活躍する多くの音楽家を招き各種の音楽会を開催、音楽の普及・振興、さらに、合併以前の「鶴岡市民歌」の制定にも尽力し、鶴岡の音楽文化の発展に寄与した。 昭和57年 勲五等双光旭日章を受章、平成5年 市政功労者表彰を受けた。

大宝館展示人物紹介
（過去に展示された人物含む）

分野	氏名	概　　要
音楽	中田 喜直（なかだ・よしなお） 大正12年（1923）～平成12年（2000）	本市の音楽文化の向上に多大な貢献をした日本を代表する作曲家。 昭和21年に初めて鶴岡を訪れ、菅原喜兵衛氏をはじめ地元の音楽愛好家と親交を深めた。以来、多忙な楽曲づくりのかたわら度々本市を訪れては音楽教室等を通して本物の音楽のすばらしさや楽しさを伝え、戦後の子どもたちのすさんだ心に希望と感動を与えた。 小学生の頃から作曲に目覚め、生涯にわたり歌曲、童謡、合唱曲、ピアノ曲を数多く手がけた。昭和27年作曲の名曲「雪の降る街を」は馬そりから見た冬の鶴岡の情景から曲想を得たという。31年には合併以前の「鶴岡市民歌」も作曲し、61年から始まった鶴岡音楽祭には毎年のように参加するなど、永年にわたり、音楽文化の振興、発展、普及に尽力した。 また、日本童謡協会会長をはじめ各種音楽団体の役員、大学教授も務めた。
音楽	佐藤 敏直（さとう・としなお） 昭和11年（1936）～平成14年（2002）	日本現代音楽協会の委員長となり現代音楽創作のリーダーとして活躍し、また、郷土の音楽振興にも多大な貢献をした人である。 鶴三中、鶴岡南高校在学時を中心に合唱、ピアノ演奏、指揮や作曲で活躍する。 慶應大学在学中に、第28回日本音楽コンクールに入選し、作曲家を志すようになった。以後民族的な感覚の濃い色彩豊かな現代音楽を継続的に発表し、日本の現代音楽の第一人者として活躍した。 一方、鶴岡土曜会混声合唱団などのために多くの作品を発表し、郷土の音楽振興にも大きく寄与した。特に、混声合唱組曲「旅の途の風に」などは、今でも全国の中学校の重要な演奏曲の一つになっている。
音楽	阿部 武雄（あべ・たけお） 明治35年（1902）～昭和43年（1968）	鶴岡の湯野浜に生まれ、放浪の人生を過ごした作曲家である。13歳でバイオリンに親しみ、後に東洋音楽学校に通い、その間も映画館に勤めたり、牛乳配達などをしていた。 昭和８年、31歳で、レコード会社ポリドールに入社するまで、全国各地の劇場や映画館を転々とした。この年、「雨の大川端」の作曲に始まり、翌年の「国境の町」は大ヒットし、続いて数々の曲を作り、多くの人に愛唱された。「むらさき小唄」「お柳恋しや」「妻恋道中」「おしどり道中」「流転」「裏町人生」などである。 晩年は、軍国主義の波で歌謡曲はさびれ、夜の銀座かいわいをバイオリンを弾いて流していた。昭和43年、東京で永眠したが、彼の曲は今日も、人びとに愛唱されている。
医学	林　信雄（はやし・のぶお） 明治30年（1897）～昭和39年（1964）	X線診断やレントゲン療法など放射線医学の先駆者であり、特に放射線による内科的診断の権威者であった。 当時のレントゲン診断といえば、骨・関節の写真診断が主であり、胸部や腹部の診断を国内で試みた者は非常に少なかった。 彼はこの分野の開拓に挑み、肺・心臓・胃・腸など、当時としては画期的な領域までレントゲン診断する道を切り開いた。医学史上の功績として今なお高く評価されている。 しかしその代償に、放射線は彼の身体を蝕んだ。親指を除く両手指が潰瘍を起こして全指を第一節より切断。更に左手を切断するまでに至ったのである。自らの肉体を実験台に供しながらも研究をやめなかった。まさに聖医というべきであろう。

大宝館展示人物紹介
（過去に展示された人物含む）

分野	氏名	概　　要
魚類学	疋田 豊治（ひきた・とよじ） 明治15年（1882）～昭和48年（1973）	北日本カレイ類の研究の第一人者、カレイの疋田として日本魚類学の基礎を確立した学者である。 シシャモ（学名オスメラス・ランセオラタス・ヒキタ）の研究にも詳しく、その名付け親でもある。研究に熱中すると夜も昼もなく、魚を見つめて朝に至ることしばしばであったと伝えられている。 庄内沖底魚の調査のため、加茂の県水産試験場に数度来場している。また教育者としても独特の風格があり、学生に敬愛され、古希のお祝いに同窓生招待日本一周愛のリレー旅行が行われ、師弟愛の明るいニュースとして話題となった。北海道文化賞・大日本水産会功労賞を受賞。
評論	高山 樗牛（たかやま・ちょぎゅう） 明治4年（1871）～明治35年（1902）	鶴岡公園内に「吾人はすべからく現代を超越せざるべからず」と刻んだ高山樗牛の墓碑がある。 これは「毎日の生活の中で、目先のことだけにとらわれず、目先のことだけにとらわれず、理想や希望や目標に向って一生懸命努力し、立派な人間になって今の世の中以上のすばらしい社会を作ろう」という意味のことを言っているように思われる。 仙台の旧制二高・旧制帝国大学哲学科を卒業したが、二高在学中から『樗牛』という号をもって校友雑誌に文筆をふるっていた。大学時代に、読売新聞社の懸賞募集で小説「滝口入道」が首位入選し、新聞に掲載されて一躍注目を浴びた。 又、大学の機関誌「帝国文学」の編集委員となり、道徳の理想や人生を論じ、更に「近松門左エ門」の論文で日本の文学者・文筆家社会で広く認められた。 大学卒業後は、一時仙台二高の教授になったが、すすめられて博文館に入り、当時最高の文壇誌といわれていた「太陽」の文芸主任になり、主として評論で名声を高めた。小説家と言われることを嫌い、学者・評論家として快刀乱麻の筆舌をふるい、文筆家を叱咤し、文芸界に大きな足跡を残した。 偉大な文学者であった一方で、心のよりどころが、時代と環境の推移にともない、浪漫主義から日本主義・ニーチェ主義・日蓮主義と目まぐるしく変わったために、一部非難の声もあった。肺の病気が悪化し、欧州留学を前にして32才の若さで没す。
文学	田沢 稲舟（たざわ・いなぶね） 明治7年（1874）～明治29年（1896）	若い女性に「自由」のなかった明治時代に、いさましくもこれに体当たりしこれを突き破って自由奔放に生きようとし、ついに敗れた若く美しい小説家。文学に熱狂するようになった才女稲舟は、鶴岡にじっとしておれず、図画修行の名目で上京しながら文学にのめりこんでいった。 当時異才新進作家・山田美妙を訪ねて文学修行の第一歩を踏んだが、これが宿命的悲劇の一歩であった。美妙との恋愛、帰郷、美妙との結婚、破婚、帰郷、煩悶、死と、22年余の波瀾の生命を終えた。 死に至るまで2年間の熱狂的文学生活の中で創作した小説五篇に「医学修業」「しろばら」「小町湯」「五大堂」「唯我独尊」がある。当時の一流文芸雑誌に発表された。 彼女の小説は、その曲想、節奏の多様多彩、その大胆なシーンの緩急・抑揚において女性作家として前人未踏のユニークなものであり、当時の文芸批評家の論議の好題目となった。内川河畔、三雪橋の付近に胸像と文学碑がある。

大宝館展示人物紹介
（過去に展示された人物含む）

分野	氏名	概　　要
文学	赤木 由子（あかぎ・よしこ） 昭和2年（1927）～昭和63年（1988）	本名、富樫菊。子供たちに深い愛情を注ぎ、特に障害を持つ子への励ましを一貫して続けた児童文学者。 幼くして両親との死別、異国での戦争体験、帰国して東京での苦難の続いた生活の中で文学への道を志し、苦労のすえ新聞・雑誌記者を経て作家となった。 戦争を憎み、いかなる差別をも許さない姿勢が数多くの作品ににじみ出ており、大作「二つの国の物語」は、満州(現在の中国東北部)を舞台に、国と国との争いがもたらす惨状を、リアルに描いた戦争児童文学である。 最初の著書「柳のわたとぶ国」をはじめ作品すべてに、子供への思いやりが脈々と息づいている。それが由子の児童文学の世界である。
文学	横光 利一（よこみつ・りいち） 明治31年（1898）～昭和22年（1947）	大正から昭和初期の鮮烈なデビュー以来、常に新しい時代の文学とは何かを真摯に追い求め、作品を通じてそれを世間に問い、ついには「文学の神様」とまで称された。 初期の作品の「日輪」や「蝿」に見られる斬新な感覚と表現は“新感覚派”と呼ばれる文学グループ結成のきっかけとなり、盟友の川端康成とともに時代を風靡した。 昭和2年、師と仰ぐ菊地寛の媒酌で鶴岡出身の日向千代と結婚。千代という大きな支えを得てからは、創作活動に没頭する。精密な心理描写で話題をさらった「機械」、激動の上海をリアルに取り込んだ長編の「上海」、西洋と東洋の係わりに切り込んだ「旅愁」等々、次々と話題作を発表した。まさに激動する昭和の文壇にあって、抜群の着想と斬新な表現で次々と作品化していった昭和の代表的作家である。この結婚により、妻の故郷庄内を心のふるさととし、毎年のように妻の実家を訪れ、湯野浜や由良海岸に遊び、湯田川温泉や温海温泉に逗留し、多くの作品を書き上げたり構想を練ったりした。この地は「癒し」の場であり「創造」の地であった。 昭和20年、妻の実家に疎開、8月には上郷村西目(現鶴岡市)に再疎開し、終戦を迎えた。「ここが一番日本らしい風景だ」と書いた場所であった。生涯最後の名作「夜の靴」の一節である。鶴岡市西目の山口公民館と東源寺に文学碑がある。

高橋　兼吉

中田　喜直

ユネスコ
食文化創造都市
鶴　岡
UNESCO Creative City
of Gastronomy